



四月 月次祭神殿講話

今日は、四月の月次祭にご参拝いただきありがとうございます。また、この後に大教会巡教として前大教会長様にお話をさせていただきますのでよろしくお願ひ致します。

さて、この四月は教祖のご誕生の月柄です。寛政十年四月十八日にお生まれになり今年で二百二十六回目の誕生日を迎えます。

教祖、中山みき様は、立教以来、五十年にわたり、「月日のやしろ」として、親神様の思召を私たち人間にお伝えくださいました。また、自ら身をもって陽気ぐらしの御本をお示しく下さいました。その道すがらのことを「ひながたの道」、教祖を「ひながたの親」とお慕ひしています。

発行所
天理教祝梅分教会
千歳市祝梅 598
☎0123-29-2055
復刊第三十七号

しかし、現在ではお姿を拝することはできなくなりましたが、変わることもなく世界たすけの上にお働きくださっています。

教祖はご存命のままおはたさしてくださっています。

四月十八日には、おぢばで教祖ご誕生祭がつとめられ、祝梅分教会からも大勢ご参拝くださる予定です。

大教会前会長様は、

浮かぶままに喋るので、自分に関係のあるところを聞いてくださつたらいいと思います。

教祖百四十年祭は再来年、一月二十六日につとめられます。

その年祭の活動っていうのは、そこへ向かう毎日毎日が大事で、それは現在、今です。

あと二年を切ってるわけですね。

そこで、私は皆さんに、まず最初に頼みたいことを言いますね。やっぱり親神様ということをもって暮らしていきたいなと思うのです。

我々は、やっぱりどこかに教祖というものが存在してなかったら、これ、信仰していませんからね。「おやさま」という四つの文字をね、心の中で繰り返しただけでかなり違うと思うのです。

そうすると、ちよつとしたことを悪く思ってしまうことがどうしても浮かぶこともあるかと思いますが、親神様、また「おやさま」と心の中で繰り返し唱えようと、悪く思えた気持ちが消えるのだと思います。

これまで長く信仰してきたから、「おやさま」という言葉だけでも繰り返し返すと、きつと喜べることに心が浮かんできます。

この二年間、努力して作っていくと、きつといいことあるんじゃないかなと思うのです。(要約)

とお話くださいました。

第2回ようばく一斉活動日

- 【日時】 令和6年6月2日(日) 13時30分から16時30分
【会場】 天理教祝梅分教会 千歳市祝梅598番地の4
【プログラム】 おつとめ 諭達拝読 ビデオメッセージ
講話「都千歳分教会長 鈴木栄先生」その後、茶話会形式のグループワーク
【参加御供】 300円(中学生以下は不要です)

【備考】 参加カード、諭達第4号、筆記具

※参加カード、諭達第4号をお持ちではない方は会場でも若干用意しております。

全国の会場案内

地域により6/1開催もあります



布教の家を終えて

高橋悟志

僕は、去年の四月から一年間、布教の家愛知寮へ行かせてもらい、毎日にをいがけに歩きました。愛知寮は一番歴史のある布教の家であり、七十三年の歴史があります。会長、前会長も愛知寮を卒業しており、親子三代で愛知寮へ行きました。

う　こ　い　ば

寮は、教務支庁の敷地内にあり、今期では三十二歳から二十六歳までの男六人で過ごしました。毎日当番制で掃除をしたり、料理をしたりと六人で助け合っていたので暮らしました。

毎日にをいがけに歩く中で、たくさんのお会いがありました。

四月の初め頃に会ったK君は二十五歳で、最初の通い先で働いていて、週三回教務支庁の前を通って出勤していました。出勤途中に道で出会って、連絡先を交換し、その日に教務支庁の神殿を参拝してもらいました。色々な身上・事情を持っている子でした。

月に一回か二回程度、一緒に出掛けたりしていました。二月から三月の間は、教務支庁に日参してくられるようになりました。九月頃におぢばへの帰参を誘った時、本人は乗り気でしたが、親の反対にあり、怪しいから連絡を取るのをやめなさいと言われて、一度連絡が取れなくなりましたが、普段行かない駅前で偶然会い、そこからまた連絡を取れるようになりました。布教の家で、にをいがけの中で出会う人はいんねんある人で、神様に引き合わされているという話を聞きました。一度縁が切れてもまた繋がることにいんねんを感じ、こんな不思議なことがあるのだなと思いました。

大学生の子とも知り合い、初席を運んでもらいました。このY君は共通の趣味があり、友達みたいな関係性でした。たまたま、K君と一緒に出掛けた時に知り合い、そのまま連絡先を交換して、個人的に会うようになりました。Y君はもともと宗教に興味があり、宗教を信仰したいと思っているけ

ど、どの宗教を信仰したらわからないということだったので、天理教を紹介して、別席も一度運んでもらいました。今でも連絡を取り合っていますが、愛知と北海道という距離でなかなか会えませんが、ぜひよぶよぶになってもらいたいなと思っています。

また、八十代の女性の通い先の方は、別の信仰がありますが、天理教の話を聞いてくれたり、応援してくれたりする方です。この方自身、近所の困っている人に積極的に声を掛けたり、近所の人たちと協力して、人の為になることをしている方でした。病気やケガとは無縁の元気な方でしたが、年末に足を骨折して、なかなか会うことができなくなりました。電話でのやり取りはしていたのですが、年齢もあり、春までは治らないという話でしたが、奇跡的に2月末頃に日常生活が送れるくらいに回復し、最後にお会いすることができました。ケガをしてから治るまでの間も奇跡的なことが続いていたそう、ケガをした時、普段一

人暮らしだったけれども弟さんが偶然来ていて、すぐに病院に行け、リハビリや完治までにも時間がかかるといわれていたのが、あつという間に治ったそうです。この方曰く、普段誰かのために思っでやっていたことが形を変えて、返ってきたのかなと言っていました。自分がやってあげたこと自体はその相手からは返ってこないけれども必ず別の場所から返ってくるというのを仰っていました。どんなことでも行動していくと、必ず何かの形で返ってくるから、ムダなことだと思わずにやってみたらいいよと教わりました。この方は、おたすけ先というよりは、先生みたいで、色々なことを学ばせていただきました。

そのほかにも、ホームレスの方とも仲良くさせてもらったり、公園や駅の常連の人ともよく話をしたり、色々な知り合いができ、色々なまなびがありました。

不思議なのは、連絡の途絶えた通い先の方でも、偶然、三月頃になると連絡が取れ、最後の挨拶ができたことで、いんねんがあつて

ちゃんと繋がっているのだなと思
いました。

通い先の方は、いんねんある人
ばかりで、自分自身のいんねんを
自覚したり、その方たちをおたす
けすることで自分の悪いいんねんを
切ると言われています。人は鏡と
も言いますが、一つ一つの出会い
が、自分自身について考える良い
きっかけになりました。

愛知寮では伝統的に毎月心定め
を決めて、それを達成する為に毎
月心を揃えて頑張っていました。
例えば、訪問件数の心定めをした
り、おさづけの数だったり、おぢ
ば帰参者だったりしました。これ
は毎月自分たちで決めるのです
が、毎月自分たちの限界に挑戦す
るような内容になっていました。

思い出深いのは、一月の心定め
で、一か月の中で全員一度はおぢ
ば帰参をするという内容でした。
六人中二人の帰参が二十七日にな
るまで決まっておらず、これは達
成するのは無理かなという雰囲気
もあったのですが、その日に二人
とも次の日に帰参することが決
まり、二十八日に心定めを達成す

ることができました。二月には天
理教校実践課程の世話取りがあ
り、三月は行事やあいさつ回りが
あり、一月の心定めが実質、最後
に歩ききれぬ心定めということが
あったので、気合が入った月でし
た。この達成には寮長もとても喜
んでくれ、僕ら自身もこの一年間
の集大成ともいえる実りある月に
なりました。

寮には、寮長、副寮長、育成員
やカウンセラーの先生など多くの
先輩布教師の方々がいました。に
をいがけについて、自分の体験談
を交えながら、様々なお話をし
ていただきました。

その話の中で印象深いのは、に
をいがけでは「おやさま」と「笑
顔」が大事だという話です。にを
いがけは、自分の力でやるもので
はなく、あくまでも教祖のお供と
して歩くということが大事だと教
わりました。人が人を変えること
はできなくて、神様を変えてくだ
さるからそのきっかけとなればい
いというお話でした。しかし、自
分が何もやらなくていいわけでは

なく、教祖のお供として、教祖の
思いを正しく受け取るためには低
い澄んだ心で通ることが大事であ
ると、教祖は現身を隠された魂
の姿で、目や耳、口も無いので、
自分が代わりとなって、おたすけ
をさせていただくんだよと教えて
もらいました。

また、笑顔でいることで勝手に
脳から幸せホルモンが分泌される
そう、辛い事や嫌な事があつて
も、笑顔でいることで常に前向き
な気持ちになれるということ、
笑顔でいることで接する人たちも
笑顔で接してくれるようになるか
ら、笑顔を決やさずににをいがけ
に歩くといふと教わりました。

また、布教の家では昼ごはんが
無いのですが、その理由も聞かせ
てもらいました。昔の布教師の人
たちは、お金もなく、御供でき
るものは何も無い中で、唯一絶対
あるものが時間で、時間の御供を
させてもらうことで、おたすけ先
の人たちのたすかりをお願いして
いました。昼ごはんを抜いている
のではなく、昼ごはんを食べる
時間を御供させてもらってたすか

りを願っていたそうです。ひのき
しんは、時間の御供と言います
が、布教の家では、自分の時間を
削って、草ひきをしたり、掃除を
したり、十二下りをしたりして、
理作りをしていました。この一年
で不思議なたすかりや出会いはた
くさんありましたが、この理作り
が実を結んでいたのかなと思いま
す。

一年間の布教の家の生活は普段
過ごすことのないものでした。こ
の一年のにをいがけや生活を通し
て、色々なことを学ばせていただ
きました。この一年で学んだこと
を活かして、年祭までの三年千日
や今後のお道を通っていきたく
思います。



『徳がやせる』

◎毎年、春にはナス、トマトの苗を庭の菜園に移植するが今年も苗が思うように伸びず、虫やバイ菌がついた原因を農家に聞くと、肥料が不足し土がやせて、地力がないからと教えてくれた。

○その時、フト

この道理を人間にあてはめて考えてみた。人は多くの恩を受けて生かされながらもすれば恩を当たり前と受けとめて恩返しを忘れていく。

○恩返しが足らないと、魂がやせて徳の力が弱り、病気や事情が現れる。病気や事情は魂がやせて徳を失った証。

ハイ！
ちょっとひとこと



教祖ご誕生祭に親子四代が帰参

四月十八日の教祖ご誕生祭に梅のはな布教所長・上杉良子さんが帰参。娘さん、お孫さん、ひ孫さんとおぢばがえりになりました。



「陽気」五月号に高橋都志子が掲載されていますのでお読みください。



あとがき

四月教祖御誕生祭には祝梅から十八名の方がおぢばに帰らせていただきました。私もその中の一人でしたが、出発の八日前コロナを発症してしまい帰らせていただけるか不安でしたが、無事、帰らせていただく事ができました。

改めて、『おぢば』はお引き寄せていただく所だと感じました。

そして、ありがたい事に、おぢば帰りに中にコロナの後遺症もすっかり無くなりました。

一緒に帰られた方々も、それぞれに不思議な親神様のお働きを見せいただき、教祖の親心を感じさせていただきました。おぢば帰りとなりました。また、是非、教祖が待つてくださっている『おぢば』に帰らせていただきますしよ。

◎別席者

中席 木村稔之

令和六年四月十八日から

十九日